浄土宗必携

第一部　浄土宗の歴史

浄土宗の歴史
名僧列伝

第二部　浄土宗の思想と行事

浄土宗の思想
塔婆の歴史と書き方
浄土宗の諸儀礼

第三部　浄土宗の寺院と美術

本山・霊場・古寺・名刹
浄土宗の美術
浄土宗の建築
浄土宗の文化財
仏具・法具

第四部　僧侶のための仏教基礎知識

暮らしの中の仏教語
一問一答
心に残る名言
浄土祖師のことば
寺庭婦人の心得
日本の宗派

第五部　年表・総大本山歴代住職

浄土宗略年表

総大本山および本山住職

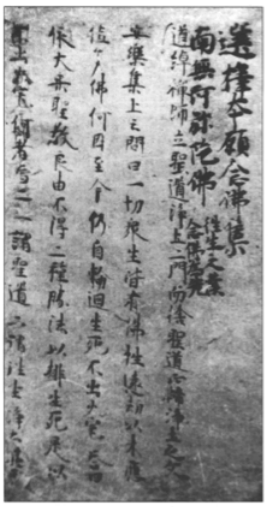
申請書類

「浄土宗の歴史」より

代の目足なり。道俗貴賤誰か帰せざる者あらん。ただし顕密の教法、その文一にあらず。事理の業因、その行惟れ多し。利智精進の人は未だ難しとなさず。予が如き頑魯の者あに敢てせんや」

と記しているように、往生極楽を勧めることは濁世末代の世にあっているといっても、観念では万人救済の教えということにはならない。

しかし、浄土教が末法の、今の時機にかなった教えであると確信した法然上人は、比叡山に伝来している北嶺浄土教とは別の浄土教が南都（奈良）にあることを知り、籠山十二年の満ちた保元元年（一一五六）下山し、嵯峨釈迦堂を訪れたのち南都に赴いた。上人二十五歳のときのことである。



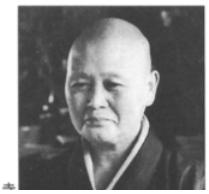
『選択本願念仏集』巻頭

「名僧列伝」より

専修念　座下にあること四年、師命により江戸伝通院の了因の室に入り、前後六年念仏に終始し、余力は宗書の閲読にそそぎ、浄土門周より宗戒両脈を相承した。綸旨頂戴の上人を嫌い、官寺の住職を厭い、正徳三年（一七一三）貞檀の逝去を機に小石川に閑居した。享保元年（一七一六）秋、麻布に移り、檀越が三河島に通津庵、根岸に四休庵を営造して道場とし、念仏をこととした。著書は『法の道芝』二巻、『本願念仏感光章』二巻をはじめ多く、八十余部百五十余巻に及んでいる。

貞把（ていは）　永正十二年（一五一五）－天正二年（一五七四）十二月七日　蓮社道誉と号し、和泉国日根郡に生まれ、俗姓は大谷氏。大永七年（一五二七）同地宝円寺貞也のもとで出家後、享禄四年（一五三一）増上寺に掛錫し、天啓のもとで九年間修学、一時帰国し布教に努めたものの思うようにならず、再度関東に赴き下総国成田山に三七日参籠、霊告を受け、口から血を吐き頭脳が明晰になったという。その後、飯沼弘経寺の祖洞に師事して宗乗を究め、天文のころ（一五三二－一五五五）下総国龍沢の水中で悟り、道誉流の伝法を完成。城主原胤栄はこの地を埋立て大厳寺を建て貞把を開山に招じた。弘治元年（一五五五）天啓のあとを襲って増上寺に晋董して、九世の法燈を継いだが、居ること八年、永禄六年（一五六三）生実に帰り、臼井村に長源寺を開創して止住した。

寺森牧山（てらもり　きょうざん）　明治十七年（一八八四）－昭和四十二年（一九六七）



「浄土宗の思想」より

〔十　念〕

〔発願文〕
願弟子等、臨命終時、心不顚倒、心不錯乱、心不失念、身心無諸苦痛、身心快楽、如入禅定、聖衆現前、乗仏本願、上品往生、聖衆現前し給い、仏の本願に乗じて、阿弥陀仏国に上品往生せしめ給え。彼の国に到り已って、六神通を得て、十方界に入って苦の衆生を救摂せん。虚空法界尽きんや。我が願もまたかくの如くならん。発願し已んぬ、至心に阿弥陀仏に帰命したてまつる。

願わくは弟子等、命終の時に臨んで、心顚倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心に諸の苦痛なく身心快楽にして禅定に入るが如く、聖衆現前し給い、仏の本願に乗じて、阿弥陀仏国に上品往生せしめ給え。彼の国に到り已って、六神通を得て、十方界に入って苦の衆生を救摂せん。虚空法界尽きんや。我が願もまたかくの如くならん。発願し已んぬ、至心に阿弥陀仏に帰命したてまつる。

悟りを求める心（菩提心）を起こしたり、修行して浄土を完成し、人びとを救おうと誓う心を起こすことを発願といい、その心を文にしたものが発願文で、ここに掲げた発願文は『往生礼讃』の中「日没礼讃」の末尾に出ている。

『観経疏』玄義分の初頭に出ている十四行偈も発願文の一つで「発願帰敬偈」と呼ばれている。

〔摂益文〕
光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨。

（如来の）光明は遍く十方の世界を照らして、

仏の光明によって利益を蒙ることができると説く偈文で『観無量

『一問一等答』より

かれ、これが転じて邪魔を払い去る功徳があるということになった。

払子は中国の禅僧間で用いられたものが、鎌倉時代、禅宗の移入とともに日本に伝わり、現在では浄土真宗以外の各宗で、意義が二転三転しながら、荘厳具の一種としての役目を果たし使用されている。

枕経とは

枕経とは、本来は終夜死者の枕頭で読経することで、お通夜の勤めをすることを指したが、後世になると終夜読経したり念仏するのを通夜、簡単に読経するのを枕経というようになった。昔は何事でも夜を徹して行なうことを通夜といったが、それが変化して読経と

満中陰は、いつ勤めるのか

仏教は、生ある者は生死を繰り返すという輪廻転生説を母体として生まれている。その輪廻する状態を生有・本有・死有・中有の四有に分け、人間の生まれてくることを生有、生まれてから死ぬまでを本有、現有、この世でいのちの終

「浄土宗の諸儀礼」より

切明の神事		
8月15日　昼		釈迦堂の念仏狂言
		4月19日　昼　踊り念仏
島根県簸川郡	境内	七人
	京都市右京区嵯峨藤ノ木町清涼寺	狂言堂
	岡山県御津郡加茂川町年末	観音堂　地区十三軒
	境内	念仏講員
鉦・太鼓・笛		狂言の衣裳あり

古来より須佐大念仏といわれ、俗に念仏立ちともいう。

壬生寺の念仏狂言より古い伝承を伝えている。

古い伝承をもち現在も行なわれている地区十三軒で行なっている念仏踊りであって、各自が「ささら」をすり念仏を称えながら輪になって回る。これは踊り以前の素朴な念仏信仰の現われである。「ささら」とは木の棒に溝を刻んで、これを竹のサラですって音を出す原始的な楽器である。

叩き鉦を打ちながら念仏を称え輪になって回る。始めは静かにゆるく回るが次第に早く烈しくなり、またもとのゆるやかな調子に戻って、次の組と交替する。かつては佐久地方の各村で盛んに行なわれたが、今はこの寺にのみ残っている（県の無形文化財）。

中陰は七日目ごとに、初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日と続き、七七日（四十九日）で終わるので、この日を中陰の満ちる日ということで満中陰といい、この日までを忌中とし、この間、魂は家の棟から離れることはなく、身近かにいると信じられている。

忌中が終わったとき、忌明けの行事として法事や納骨を行なう。昔はその当日行なうのを例としたが、現在では勤務の都合や交通の発達・社会状勢の変化で、遠隔地に居住している人も多いので、初七日も葬儀の当日営む例が多い。

満中陰忌は、月の後半に死亡した場合三月目、三カ月越しになるため「しじゅう苦が身につく」、不